

第5回総会講演会レジュメ

(H21. 6/19 (金) 15:00～17:30開催)※

場所 技術士会荻手ビル5階 AB 会議室

参加者 38名 (講師を含む)

1. 安全余裕と継続的な改善

講演者：岡本 孝司教授 (東京大学大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻)

放射線環境下の限界熱流束が増大する知見が得られた。原子炉の安全解析は ROSA 等非放射線環境下での実験に依存していたため、より合理的な安全評価の可能性が出てきた。原子炉の安全設計を一般に説明する場合に安全システムの重要度分類の説明が必要であるが、一般は感覚的に理解する方が多く、より身近な自動車等の事例を用いて説明する必要がある。車の場合も原子力も重要な人間を守るという同じ目的を持っている。地震安全に関する考え方の合意形成には以下の2点、(1)安全を感覚ではなく、定量的に把握する、(2)安全余裕に対する定量的評価、が重要なキーワードとなる。日本と米国で減衰係数の考え方に差異があるように、リスクを踏まえた安全に関する考え方の合意形成が大事である。より一層の安全に向けては、トラブルから学ぶ「改善活動 (CAP)」は品質保証活動の根幹をなす活動である。不適合だけでなく、幅広い改善活動をデータベース化し、安全につなげることが重要。



原子力・放射線技術士に期待することとして、以下の2点、(1)技術士の広い普及が鍵、(2)学会と技術士会、がキーワード。事業者が企業に発注する際に仕様書に技術士の監査をいれる等の民間デファクトスタンダードの普及により、技術士資格の必要性が標準化する。これにより、国、自治体、事業者、メーカー、協力会社などに全て技術士が居る状態となることが期待できる。

2. 意見交換

部会員等出席者も参加して活発に意見交換が行われ、多くの助言、示唆を頂いた。：

・技術者倫理と安全文化の違いについては、国民への信頼は技術者倫理、安全文化は組織に対するもので、組織の中に技術士がいることが安全安心に繋がる。・電力業界で技術士の必要性を浸透させるには、民間デファクトスタンダードのパイロットプロジェクトを実施し、電力が地元にアピールしてうまくいけば、電力は横並びで広がる。・重要度分類の考え方をどこまで国民が理解しているかは、まさに BSE の事例が証明している、科学的な根拠が通用しない(0 でないものは1である)。・安全設計の余裕はどこまで取るべきかでは、unknown は余裕を取るべきで、定量化して明らかになったものは減らすべきである。



以上

※技術士会員の方は《Pe-CPD》<http://www.engineer.or.jp/cpd/pe-CPD.html> から講演内容のHP視聴ができます。(8月予定)